

北米やオーストラリアではエコ・ハウスとして人気の「ストローベイル・ハウス」が、日本でも注目されている。その静かなブームの中心人物のひとりが建築家、大岩剛一である。その著『わらの家』は、しかし、単なるストローベイルについての本でもないし、ただの建築の本でもない。それは、「家に住まう」ということが元々どういうことを意味していたのかを、子どもたちと共に考えようという本だ。

大岩は『わらの家』を、里山の風景のこんな描写から始める。

「里山の集落を歩くと必ず目につく庭先のカキの木。スモモ、夏ミカン、ウメ、クリ、キンカン、ザクロの木。どの家の庭の植物も、そのほとんどが食べられるもの、葉になるものばかり……、メジロやウグイスやモズやシジュウカラといった野鳥たちは近くのヤブや裏山と、お目あての庭木の間を行き来する。家の壁にはヤモリ、軒下にはツバメ、庭の石垣には、ヘビやトカゲ。池には金魚やカエルやゲンゴロウ。コオロギは家の中にも現れる。昼の庭には蝶やトンボ、夜はコウモリや蛾。

なぜ人の住む家に動物や鳥や虫が集まるのか。そこがこれらの生きものにとって安全で快適で、巣づくりに適し、食料も豊富な場所だからだろう、と大岩は考える。家はたいてい近くの山の土や木でできているし、庭の動植物も昔からその土地の気候、水、土と慣れ親しんだものがほとんどだ。ここには人間を含む様々なものの共同體がある。

「屋根も軒も、壁も床下も、庭も垣根も、みんな里山。家が、近くの森や水辺や田んぼと、大地としっかりつながっている……」

……生きものとの関係が変わった

辻 .. 鳥くらいならまだしも、いろんな虫が集まったり、トカゲやヘビやコウモリが現れる家といえは、今の都会の子どもたちなどは結構、抵抗があるかもしれませぬ。

大岩 .. 子どもだけじゃない。大人でも若い人は、ぼくたちが子どもの時の住まいの話をするとショックを受けますよ。それで、「君たち、子どもの頃昆虫採集とかしなかったの」と聞くと、「そういえば、していた」とたいてい答える。つまり、どこかの時点で大きな転換が起こって、今では虫にほとんどヒステリックな恐怖や嫌悪を抱くようになっていいる。皆さん、思い当たることがあるらしく、自分自身に驚いていますよ。

辻 .. ぼくの大学の学生たちもそうです。都会の人には「木嫌い」も多いですね。観光地の森にある木はいいけど、住まいの周りには敬遠する。虫が出るし、葉っぱが落ちて邪魔だから嫌いだとか。

大岩 .. そうしたこと、住まいそのものが生きものたちを拒絶するようなものになっていったことは重なっている、とぼくには思えます。

辻 .. 野生の生きものが嫌われる一方で、ペットとか室内の観賞用植物への人気は増すばかり。「生きもの」の概念そのものが変わってしまったようですが、それと並行して「住む」ということの意味もまた変わったということですか。